

つながる こども新聞



発行 読売DoMo新聞
 [事務局]
 〒104-8433 東京都中央区築地 5-3-2
 朝日学生新聞社内 ☎03-3545-5225

授業にどうぞ
 新聞の印刷用PDFは、こちらからダウンロードできます。授業などにお役立てください。

https://www.asagaku.com/pdf/kodomo24.pdf

2024年
 (令和6年)
 初夏号



「こども新聞サミット」に参加した「こども記者たち」(3月27日、日本科学未来館で)

笑顔の未来に こどもが発信

全国の小学生向け新聞の読者が「こども記者」となって取材・議論する「こども新聞サミット」が3月27日、日本科学未来館(東京都江東区)で開催されました。「よりよい世界をつくるためには」をテーマに、こども記者たちは自分たちの未来について真剣に話し合いました。



取材体験を通じて自分たちが考えたことを発表し、未来について話し合うイベント。次世代を担う子どもたちに社会への関心を持ってもらおうと、2017年に始まった。

7回目となった今回のサミットには、全国12の新聞社から18人のこども記者(小学4～6年生)が参加しました。

まずは今年1月、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟の鴨志田智也さんを講師に招いた勉強会が開かれ、こども記者たちは「持続可能な開発目標(SDGs)」について学びました。その後は3チームに分かれて、「国際理解を深めるためには」「人手不足」「地球を守るために私たちができること」という3つのテーマで取材に取り組みました。

サミット当日は取材した成果をチームごとに発表した後、より良い未来に向けて何をすべきかについて全員で話し合い、「異文化・少子化・CO2 地球の課題は自分事 笑顔あふれる未来に向かって、発信しよう子どもから!」という提言がまとまりました。

日本と世界 つなげるために



世界では争いが続いています。私たちの新聞にも、悲しいニュースがのびがります。そんななかで私たちは、「国際理解を深めるためには」を考えました。

言葉や文化の違いを人と、どう仲良くするか。こども記者たちは各地の取材で、ヒントを見つけました。▽常識をおしつけない▽互いの文化を尊重し合う▽自分から話しかける▽教え合おうと、相手も自分もうれしい▽意見が違ったら、そう思った理由をお互い話す▽おらかな心で、です。

このヒントをもとにこども記者たちで話し合い、次のように提言をまとめました。

自分と相手は違う人、どっちの意見も大事にしよう。広くおだやかな心で自分から話しかけて相手を知ると仲良くなれる。得意なことを教え合い日本と世界をつなげよう。

多様性は「楽しむもの」

朝日学生新聞社 朝日小学生新聞

世界の現実を知る人に話を聞きたいと、国際連合(国連)の活動を日本で伝える国連広報センターの根本かおる所長に取材しました。

根本さんは難民の人々を助ける国連難民高等弁務官事務所で働いた経験もあり、アフリカで最も貧しい国といわれるブルンジの人々との交流をふり返りました。食べたことのない動物の料理が出てきた時には「精いっぱいのごちそう」と受け止め、「多様性を楽しもう」と考えた体験を話してもらいました。



「オープンマインド」や「相手を知ろうとすること」が大事ということも教わり、国際理解の奥深さや大切さに思いをめぐらせました。

国際協力の現場を思う

信濃毎日新聞社 信毎こども新聞

教育や医療、福祉、農業など約190の分野で開発途上国の暮らしを支える国際協力機構(JICA)の青年海外協力隊。こども記者たちは、派遣前の隊員が訓練を受けるJICA駒ヶ根(長野県駒ヶ根市)を訪れました。訓練は合宿形式で、その7割は語学。こども記者は施設見学や訓練生への取材に加え、中南米で広く話されるスペイン語も学び、国際協力の現場に思いをはせました。



外国人が暮らしやすい街に

神戸新聞社 子ども新聞 週刊まなびー

兵庫県神戸市には多くの外国人が住んだり、働いたりしています。慣れない日本での暮らしをよりスムーズにできるように支援をする「神戸国際コミュニティセンター」を訪れました。文化や言葉の違いでこどくを感じたり、経済的に困ったりしないように、さまざまな取り組みをしていました。特に「阪神・淡路大震災」を経験した神戸では、多言語で防災情報を発信しています。



取材した、タイと中国の留学生たちは英語の表示をもっと増やしてと話していました。互いの存在を意識して、思いやりを持って協力することが大切だと思いました。

お互いを理解する工夫

沖縄タイムス社 タイムスワラビー

日本人と外国人の選手がいっしょにプレーしているプロバスケットボールチーム・琉球ゴールデンキングスの2選手を取材し、お互いを理解するための工夫を探りました。



田代直希選手と、米国出身のアレックス・カーク選手によると、外国人選手は英語で難しい言葉を使わないこと、日本人選手は日本語をゆっくり話すことなどを心がけているそうです。自分たちの文化を正しいと思ひこみすぎず、相手の文化を学び、受け入れる姿勢が大事だと強調していました。

国と国をこえて人がつながる時には、お互いが少しずつ歩み寄って理解することが大切だと感じました。

◇このページは、朝日学生新聞社が編集しました

国際理解を深めるためには



朝日学生新聞社(東京都)

朝日小学生新聞



信濃毎日新聞社(長野県)

信毎こども新聞



神戸新聞社(兵庫県)



沖縄タイムス社(沖縄県)





専門家と通信 アドバイス



野菜作り

ハイテク技術を使って、知識がない人でも「熟練の農家」のように作業ができる方法が開発されている……。そんな話を聞きつけ、取材に向かいました。東京都調布市にあるN-TTアグリテクノロジーの施設には、ちょっと変わったトマトハウスがあります。高性能カメラがついたスマートグラスをかけると、自分が見ている風景が遠く離れた場所のパソコンにも映し出されます。そして、その画面を見た専門家から「このトマトはもう収穫して大丈夫」といったアドバイスをもらえるのです。誰もが農業に挑戦しやすい環境を整えることで、人手不足を解決したいという思いに共感しました。

チームBの7人が取材したテーマは、「人手不足」です。いま日本では、多くの分野で「働く人が足りない」という問題が起きていて、ものづくりの力が落ちたり、サービスの質が下がったりすることが心配されています。まずは人手不足の問題に詳しい専門家からアドバイスをもらい、オンラインで取材することにしました。

人手不足

技術・知恵・挑戦

米作り

肥料・農薬ドローンで

人手不足に直面している農家の現状を知るため、茨城県龍ヶ崎市でコメを生産している横田農場を訪ね、横田修一社長(48)を取材しました。横田農場は社員10人で、170haの水田でコメをつくっています。広い田んぼを少ない人数でまかなうため、できるだけ人がやらなくていい仕事を増やし、作業

の自動化に取り組んでいるそうです。例えば、ドローンで肥料や農薬をまいたり、自動運転ができるロボットトラクターを使ったりしていました。また、苗の品種を変えて作業の時期をずらすといった対策もしていました。困難に直面しても、頭を使って工夫を続ける大切さに気づかされました。



漁師体験 若手を増やせ 漁業

働き手が足りないのは、漁業も同じです。水産業が盛んな宮城県石巻市で若手漁師を育てる事業を行っている一般社団法人「フィッシャーマン・ジャパン(FJ)」を取材しました。全国的に漁師の数はどんどん減っています。なかでも宮城県は、2011年の東日本大震災の大きな被害で、減少に拍車がかかったとい

われています。でも漁業は日本の食文化を支える大事な仕事です。そこでFJは、漁師体験ができる学校や、若手漁師向けのシェアハウスをつくることで漁師を目指す人を増やそうとしています。人手不足の解消には、技術の発展だけでなく、働く人たちがやる気になる環境を整えることも大事だと学びました。



バス 完全自動運転へ 交通



お年寄りにとって大切な交通手段のひとつがバスです。でも、運転手の数は各地で足りなくなっています。この問題を解決するために北海道上士幌町が始めた自動運転バスを取材しました。上士幌町は人口約4800人で、町民の3人に1人は高齢者です。とても広い町なので買い物などに

バスが欠かせません。そこで上士幌町は2022年12月から、小型の自動運転バスを走らせています。いまはオペレーターがバスに乗って運行をサポートしていますが、1年以内に完全な自動運転を目指しているそうです。高齢者が暮らしやすい社会にするためにも、自動運転の技術がもっと進んでほしいと思いました。

チームBの7人が取材したテーマは、「人手不足」です。いま日本では、多くの分野で「働く人が足りない」という問題が起きていて、ものづくりの力が落ちたり、サービスの質が下がったりすることが心配されています。まずは人手不足の問題に詳しい専門家からアドバイスをもらい、オンラインで取材することにしました。

オンライン取材を受けてくれたのは、法政大学の並木雄二教授です。並木教授は、社会人向けに会社の経営について教えている専門家です。日本では人手不足が起きている理由について並木教授は、「少子高齢化が進んだ結果、日本の人口がどんどん減ってしまっているため、働き手

も減っている」と解説してくれました。世界の中でも日本の人口減少のスピードが速いため、他国より先にこの課題に直面しているそうです。その上で、人手不足の問題を解決する道を示してくれました。そのひとつは、自動運転やロボットなどのハイテクな技術を上手に使うことです。並木教授からは「いまのピンチをチャンスとしてとらえ、前向きにがんばって人々を取材してみてください」とアドバイスをもらいました。

少子高齢化で人口減少

専門家へ聞く
なぜ人手不足?

◇このページは、読売新聞社が編集しました

ひとでぶそく
人手不足



読売新聞社(東京都)



北海道新聞社(北海道)



河北新報社(宮城県)



茨城新聞社(茨城県)





「めんどくさい」にサヨナラ

ダンボールコンポストに挑戦！ 東京



コンポストの講習会に参加する山田里彩さん(左端)と寺岡真由莉さん(左から2人目)

東京都八王子市が行っているごみ減量の取り組みを取材しました。同市は、ごみの戸別収集や小学生への出前授業などのほか、生ごみを堆肥に変える「ダンボールコンポスト」の普及に努めています。講習会に参加し、自宅で挑戦してみました。臭いはほとんどなく、意外に簡単にできることが分かりました。友達にも勧めたいです。

四つの新聞社から5人のこども記者が参加したチームCがテーマに選んだのは、「地球を守るために私たちができること」。全国各地の地球に優しい取り組みを取材し、提言をまとめました。

提言

目指すのはCO₂排出ゼロの未来
地域の取り組み、私の取り組みを伝え合おう
知って、まねして、資源と地球を再生しよう
「めんどくさい」にはサヨナラ



LRTについて取材する富沢美生さん(右)

栃木

CO₂排出ゼロ 公共交通LRT

昨年、栃木県宇都宮市と芳賀町を結ぶ次世代型路面電車(LRT)が開通しました。宇都宮市などを取材し、LRTは二酸化炭素(CO₂)を排出せずに動くため、環境を守るために有効な交通手段だと分かりました。出かける時にできるだけ利用し、その良さを周りに伝えたいと思います。身近なことから実践していきたいです。

分別28品目 町の代名詞に 鹿児島



生ごみ堆肥化工場を見学する松尾樹志さん(左)

鹿児島県大崎町は、28品目のごみ分別に取り組んでいます。埋め立て処分場の延命を目的に始まったリサイクルは、お金をかけず環境に優しい工夫がいっぱいで、今や大崎町の代名詞に。国連でも紹介されているそうです。一人一人がしっかりと分別し資源として生かすことが、地球の未来を守ることにつながると再認識しました。

福島の海のプラごみ みんなで減らそう



地元の海岸で、プラスチックごみを集める野村美貴さん

地元の海岸を調べたらプラごみがたくさんありました。海のプラごみの95%は沈んでいるそうです。丈夫で便利なプラスチックは生活からなくせません。海のプラごみを減らすために、私たちみんながプラスチックを管理して使うことが大切だと学びました。お米を材料に混ぜ、二酸化炭素排出量を削減したプラスチックも取材しました。

◇このページは、毎日新聞社が編集しました

地球を守るために
私たちができること



毎日新聞社(東京都)



毎日新聞社(東京都)



福島民友新聞社(福島県)



下野新聞社(栃木県)



南日本新聞社(鹿児島県)

小学生新聞

ジュニア情報局

子どもタイムズ

オセモコ

株式会社 ロボット科学教育
[クレファス]
crefus

課題に真剣に向き合い、 試行錯誤することによって より良い未来が見えてくる

私たちクレファスは第1回目からこども新聞サミットを応援していますが、今回も記者の皆さんはすばらしいプレゼンテーションをしてくださいました。きつと何度も何度も練習を行ったことでしょう。たくさんの人に見つめられ、緊張もあったと思いますが、自信に満ちあふれた表情で話すことも記者の皆さんから、深い学びを得られたことがしっかりと伝わってきました。

「人手不足」について発表したBチームのこども記者の皆さんが取材していた「スマート農業」は、国が推奨する仮想空間と現実空間を融合させ、経済の発展と社会的課題を解決する「サエティ5・0(超スマート社会)」の入口として、これからのより良い未来が見える非常に興味深い内容でした。

サミットの大きなテーマ「より良い未来をつくるためには」は、私たちにとって身近な議題であるにもかかわらず、明確な答えが出せない難しい問題だと思えます。正解のない問題に向き合い、答えを探していくことも記者の皆さんの取り組みは、大人になっても役立つ力だと感じました。

学校教育や受験科目などにも情報科が導入され、プログラミング教育がより身近なものになってきました。わからない事を自分で考えなくても、AIやロボットが教えてくれる、助けてくれるといった事が増えてきていると感じますが、それはあくまでも答えが決まっていることに限ります。答えが決まっていけないことは自分で考えなければいけないのです。

そのため、私たちクレファスの授業では、「すぐに答えを教えない」「指導をしています。生徒が課題と真剣に向き合い、たとえ失敗したとしても、その結果を踏まえ、何がいかなかったかを考えたり、試行錯誤したりする事に意味があるからです。



おかざき だいすけ
岡崎大介
ロボット科学教育
Crefus 学園長

というロボットプログラミングの全国大会を行っています。2回しかチャンスがない競技の前には、ロボットを最終調整する時間を設けており、今年も本番ギリギリまで試行錯誤する生徒たちの真剣な表情が見られました。本番でうまくいった生徒もいれば、失敗して悔しさをかみしめている生徒もいましたが、自ら答えを探して、真剣に取り組んできたからこそ見られた姿なのだと思えます。



夏休みからプログラミングを始めるなら楽しく本格的なCrefus!

7月開講 2024年度

夏期 プレスクール 入会生受付中!

夏期入会
キャンペーン

入会金
特別割引有り!

※校舎により
キャンペーン内容は
異なります

夏休みからでもスタートできる、新規入会生のための特別カリキュラム!

夏期プレスクールは、ロボット製作やプログラミングの基礎をしっかり学ぶスタートダッシュ講座です。ロボット・プログラミング初心者でも安心して楽しく学べる! 年長~中学3年生のみなさん、始めるならこのチャンスお見逃しなく!

※夏期プレスクールは先着順申し込みのためお早めにお申し込みください。

[使用教材]
LEGO®Education
SPIKE™PRIME

夏期プレスクール

2024年7月下旬~8月中旬

crefus クレファスコース

授業時間 1回90分×6回

対象学年 小学3年生~中学3年生

受講形式 教室もしくは、オンライン(e-crefus)とお選びいただけます

Kicks キックスコース

授業時間 1回50分×4回

対象学年 小学1年生・2年生

受講形式 教室にて対面受講

crefusとは

設立から20年以上にわたり、ロボットプログラミングとSTEM教育のバイオニアとして子どもたちにワクワクを与えてきました。中学生や高校生が本格的なプログラミングの学習を行うのに十分なカリキュラムが揃っています。



Crefusの特長

世界最大級のロボット競技会FLL(ファースト®レゴ®リーグ)に日本代表を数多く輩出! ロボット検定認定校!



無料体験受付中!

詳しくは
こちらから!

気になったらまずはお問い合わせ!

メール info@crefus.com HP <https://crefus.com>

フリーダイヤル **0120-610-419**

[受付時間] 火曜~土曜 10:00~18:00

東京都江東区豊洲4-2-1 2階

学校の先生方へ



Crefusでは学校の出張無料体験授業も受け付けております。お問い合わせはこちら。

ロボット科学教育 **crefus** [クレファス]

年長~小学6年生向けも開催中!



2024-2025 三菱アジア子ども絵日記フェスタ

「よりよい世界」を作るための学びは身近なところから得られる

それぞれのテーマについて、専門家に取材をし、問題を明確にして、「自分たちに何ができるか？」を考えていく。その過程がすばらしかったです。...

文化や生活がえがかれていることもあれば、「お母さんに怒られた」「きょうだいげんかをした」というような、日本でもよく見られる光景がえがかれていることもあります。...



鴨志田智也 日本ユネスコ協会連盟 海外事業部副部長

なぜか？ 調べれば、それは海洋プラスチックの問題などを解決する手段だとわかるはず。身の回りの出来事やニュースなどに少し敏感になって、考える習慣をつけてみてください。



【プロフィール】1977年東京生まれ。民間企業勤務後、日本ユネスコ協会連盟でアフガニスタン、ネパール、インドなど開発途上国での教育支援活動である「世界寺子屋運動」に従事。アジアにおける交流事業や保健医療支援なども担当している。

2024-2025 三菱アジア子ども絵日記フェスタ

アジアの子ども絵日記コンクール

募集期間 2024 6/1 2025 1/15

アジアは、みんなのとき、いっぱい、知りたい。

アジアの子どもたちに、絵日記で、みんなの暮らしを伝えよう。



テーマ 「アジアのみんなに伝えたい、わたしの生活」

募集対象 6歳～12歳(応募時点)

主催：三菱広報委員会/アジア太平洋ユネスコ協会クラブ連盟 公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

後援：ユネスコ(国連教育科学文化機関)※申請中/外務省 文部科学省/大阪府/大阪府教育委員会

三菱アジア子ども絵日記フェスタ選考委員会



委員長 佐藤一郎 (洋画家) 副委員長 齋藤芽生 (画家) 委員 大石芳野 (写真家) 委員 池上彰 (ジャーナリスト) 委員 里中満智子 (マンガ家)

応募と作品に関するお問合せ 詳細につきましては応募要項をご覧ください。応募要項は下記事務局までお問合せいただくか、ホームページからもダウンロードいただけます。

三菱アジア子ども絵日記フェスタ実行委員会事務局

TEL:03-5777-6825 FAX:03-5777-5351 E-mail:enikki@cicinc.co.jp

https://enikki.mitsubishi.or.jp

公式HP 公式X @asia_enikki



国連広報センター所長 根本かおるさんより

チームAの子ども記者から取材を受けたことがきっかけで「ぜひ、自分も子ども新聞サミットにかかわらせてほしい!」と願ってくださった。書くことや、物事を深く考えることがとても好きだったんです。サミットでは、私の子ども時代と同じように、一つの物事を掘り下げて考えることが好きな子どもたちに大勢出会えて、本当にうれしかったです。

「第7回子ども新聞サミット」の感想を聞きました。



子どもの頃、私はジャーナリストになりたいと思っていました。書くことや、物事を深く考えることがとても好きだったんです。サミットでは、私の子ども時代と同じように、一つの物事を掘り下げて考えることが好きな子どもたちに大勢出会えて、本当にうれしかったです。

みなさんは今、学校でSDGsを学んでいることでしょうか。2030年までに、世界をもっと持続可能で、一人ひとりが輝ける場所にしようという目的で定められた、世界目標のことですね。

子ども記者の発表を聞いて一番感じたのは、あらゆる問題はすべて、SDGsに通じているということでした。

たとえば、「人手不足」について調べたBチーム。人手不足を解消するためには、外国人に働き手になってもらう、という手段が考えられます。外国人の皆さんに日本で自分らしく暮らしてもらうためには、Aチームが調べた「国際理解」が欠かせません。

また、Bチームは農家の方や漁師さんにも話を聞いていきましたが、農業や漁業は気候変動や環境問題と切り離せない分野です。Cチームの「地球を守るために」という課題とつながりますよね。

みんなが異なる課題に目を向けていたようで、実はすべてが一つにつながっていたのです。今回、子ども記者になった皆さんは、「ジャーナリスト」という仕事の醍醐味を感じたと思います。その一つが「自分の意見交換の場では、国連の立場からガザの戦争についてもお話ししてくれました」



根本 かおる様



最高水準の学習環境をご家庭へ



2024年春合格実績
20年連続39回目の日本一達成!!
灘中111名

浜学園の通塾スタイルを家庭で再現

浜学園Webスクール

ココがスゴイ! Webスクールの6つの特徴

- 1 充実した講義ラインナップ**

メインとなる「Webマスターコース」「Web最高レベル特訓」に加え、「Web講習会」「Webオープンイベント」などのオプション講座もご用意しています。
- 2 リーズナブルな受講料**

浜学園が誇る「質の高い受験指導」をお届けします。講義映像は、実際の講義を撮影・編集したもので、臨場感溢れる講義をご自宅に再現されます。
- 3 オリジナルの教材**

Webスクールで使用する教材は、通塾生と同じ「浜学園オリジナル」。長年の指導の中で蓄積されたノウハウが、ふんだんに取り入れられています。
- 4 頼れる学習サポート**

「テキストWeb全問解説講義」などのお子様の「どうしてもわからない」をサポートする制度や、「講演会・説明会」「個別相談」といった、保護者の悩みを解消する制度をご用意しております。
- 5 圧倒的な合格実績**

毎年多くの塾生が、志望校に進学しています。質の高い講義だけでなく、きめ細やかなフォロー体制などを通して、皆様を合格まで導きます。
- 6 確かな技術力**

配信される講義は、塾生たちの前で実際にやっている授業を映像化したものです。また、Web全問解説講義等はスタジオ撮影のWeb専用講義となっており、指導内容から最適な講義を最適な方法で映像化しています。



浜学園Webスクール

小1~小6
ご自宅で受講
詳細申込

進学教室 浜学園 小1~小6 関西・東海・沖縄に47教室展開 ☎0120-081-113
駿台・浜学園 小1~小6 東京・神奈川に6教室展開 ☎03-5283-7774

「未来社会の創り手」が育つ SDGsの学び

主催者側の都合で3つのグループに分けられた上に、「国際理解」「人手不足」「地球を守るためにできること」というグループ毎のテーマを大人から「与えられて」始まったことも記者の学びです。普通ならば、各新聞社の期待に沿って上手なプレゼンをする程度で終わりがねない設定です。

それなのに、自分の言葉で語り、志をもった案を示し、互いに聞き合い、学び合い、ゴールを目指して協力し合うという、SDGsの4番で示される「質の高い学び」が実現されていました。

学習会や取材活動の中で驚きのある事実との出会いがあり、SDGsの実践者や、その生き方との出会いがあって、問題意識が明確になったのだと思います。また、これらの出会いを元に調査、実験、実践、そして対話を重ねることで、思考力や判断力も磨かれ、今回の豊かな表現力につながったのだと思います。



手島利夫

NPO法人
日本持続発展教育(ESD)
推進フォーラム理事



【プロフィール】1952年、東京生まれ。NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事。江東区立東雲小学校長、江東区立八名川小学校長を歴任し、ユネスコスクールとしてESDカレンダーの開発・ESD推進に携わる。

子ども記者さんたちには、学びの出発点となる「自ら問題を発見する力」と、誰に出会い、どのように調べたいか「学びを計画する力」を一層高めてほしいものです。子ども新聞サミットから、SDGsの推進者・「未来社会の創り手」が育まれていることに喜びと期待を感じます。

子ども記者の皆さんの SDGsへの熱い思いと、 深い理解に脱帽

いよいよ最後の提言をまとめるときでした。子ども記者の皆さんに「誰がやるの?」と聞いたとき、「やるのは自分たち」「自分たちから」などの発言がありました。そこで、提言に「子どもから」を入れる提案をしました。

すると「子どもだけじゃなくて、大人も」「子どもたちが中心に、大人も」「大人も手助け」などの意見が続きました。困った私は「子どもに押し付けるわけではないよ。子どもがやれば、大人も動くから、まずは子どもから動いてほしいんだ」と伝えました。

結果として、「子どもから」を提言に入れることに決まりましたが、子ども記者さんからの「大人も、もつとやって!」というメッセージが伝わりました。改めて、大人が率先して取り組まなければいけないのだと反省しました。

その他にも「自分事」「笑顔あふれる」「未来」「伝えよう」の言葉が、話し合いで提言に加えることになりました。こ



関口修司

一般社団法人 日本新聞協会
NIEコーディネーター



【プロフィール】一般社団法人日本新聞協会NIE(新聞教育)コーディネーター。東京学芸大学卒業後、東京都立小学校教諭に。社会科とNIEを中心に研究し、1991年から17年間、群馬大学教育学部非常勤講師も務めた。2004年度から東京都北区の3小学校の校長を歴任。2017年から東京未来大学で非常勤講師も務める。

ども記者さんのSDGsへの熱い思いと深い理解には、脱帽です。

サミットの始まる前は、大人の私が「他人事ではいけませんよ」と教えるつもりでしたが、逆に子ども記者の皆さんに、たくさんのことを教えてもらいました。

読者の皆さんは、この提言を、ぜひ自分事として受け止めて、地球の課題解決に取り組んでほしいです。

もちろん、大人もがんばります!

「自分事」として発信を続け できる事を少しづつ 持ち寄り合おう

「国際理解」「人手不足」「地球を守る」――それぞれのチームが取り組んだテーマは、見ればばらばらに見えますが、実は根底でつながりあっている問題です。どのように国境や国籍を超え、異なる文化とつながり合えるかを考えたとき、実は私たちの隣にも、様々な言語、バックグラウンドの人々が暮らしていることに気がついていくでしょう。

少子化などで日本が人手不足におちいる中、経済活動の多くが今、外国人労働者に支えられています。異国である日本でも働き、暮らし続けようとする人たちの安心、安全をどのように守るのか、という視点は欠かせません。そしてさらに大きな視野で世界を見るとき、未来の人たちを含めた命を守るためには、地球環境が持続的なものでなければならぬでしょう。あまりに課題が山積みで、途方に暮れてしまうこともあるかもしれません。

が、どんな社会の変化も、それぞれが「自分事」として発信を続け、できることを少しずつ持ち寄り合うことから始まります。

子ども記者さんたちがチームを超えて言葉を交わし、知恵を出し合いながら一つの提言をまとめていった作業は、その大切な一歩です。そして二歩目も、三歩目も、ともに歩んでいきましよう。



安田菜津紀

認定NPO法人 Dialogue for People 副代表
(ダイアログフォーピープル)
フォトジャーナリスト。



【プロフィール】認定NPO法人 Dialogue for People (ダイアログフォーピープル / D4P) フォトジャーナリスト。同代表の副代表。16歳のとき、「国境なき子どもたち」友情のレポーターとして、カンボジアで貧困にさらされる子どもたちを取材。現在、東南アジア、中東、アジア、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。著書に『写真で伝える仕事-世界の子どもたちと向き合って-』(日本写真企画)、他。上智大学卒。現在、TBSテレビ『サンデーモーニング』にコメンテーターとして出演中。